

満州生活体験記

神奈川県 三 堀 幸 一

渡満した時の世状について

昭和の経済恐慌は、とどまることなく熾烈を極めていた。実業学校を出ても就職ままたらず悶々の浪人生活が続いた。そのとき偶然東京世田谷国士館の、渡満学生募集広告が目に入った。改めて見なおすと、「満州国文教部第一号認可専門学校鏡泊学園学生募集云々」満州事変直後の津々浦々、満州の話題で持ち切り、自分もこの渦中の一人であった。早速応募した。試験は作文と面接であった。合格通知を手にした時のうれしさは、今でも記憶に鮮明である。入学金三百円を次兄の協力で納入して四月入学。バラック建の高拓の生活が始まった。仲間は二百人。起きぬけのマラソンに始まり、柔剣道、支那事情、中国語と、七月一ぱいの訓練を終わった。

あこがれの満州へ

昭和八年八月一日東京駅発、神戸港よりハルビン丸に乗船、玄界灘の大波の試練を受けて大連着。先人の血の染む、大地をただ今踏んだのだ。旅順水師營奉天と感動の内に戦蹟見学をすませたことは、今後の私たちに無言の力づけとなった。新京では國務院を訪問して、鄭孝胥國務總理大臣の訓辞を頂いた。吉林經由最終地敦化着は十一日間を要した。

敦化の外貌

街は周囲を城壁で囲み、東西南北四つの門がある。人口三万人地方小都市で、日本領事館もあった。日曜日には館員と剣道や野球などで親睦試合が行われた。歴史書によると、七百二十七年から渤海との交流があり、五京の一つ中京顯徳府はここから東方至近距離にあり、第三代大欽茂の四女の墓が発掘され、壁画や墓誌の貴重な副葬品まで発見され、謎の渤海国解明に役立つことが報じられた。私たちが渡満して最初の住居が、古都近くであったとは、正に奇遇であった。

鏡泊湖畔へ移動

教化待機中湖沿では宿舍の建設が進行中で、九年一月には第一次現地踏査班が鏡泊湖入りした。二次三次と続き四月には解氷すれすれで、全員の移動を終わり、風光明媚な湖畔生活が始まった。山田総務は皆の信頼を一人背負って極めて元氣旺盛にして、周辺の地形調査や原住民との交流で毎日充実した日を送られた。

山田総務の遭難

入植後の残務処理のため、昭和九年五月職員二人、学生五人、通訳一人、守備隊兵五人の編成で、学園トラックで寧安県公署に出張された帰途。共匪の計画的襲撃に遭い、大廟嶺において全員殉難された。大黒柱を失った学園は、昭和十年十月繰り上げ卒業が挙行された。各人の希望により進路が選択された。

再会を約して同志四散す

現地残留三十人、第四次城子河開拓団へ基幹移民として入植する者、北満三河へ自由移民としてロシア式酪農を志望する者、協和会、拓殖公社、満鉄へと、再会を約して四方へ散った。私は、もとより理想の鏡泊学園村づくりの現地残留三十人の一人である。中央部

では現地残留者の取扱いに苦慮した模様である。

東宮少佐の来園

昭和十一年三月、開拓指導者として有名な東宮少佐が関東軍の内意を受けて来園された。徹夜の懇談の結果「諸君の気持ちはよく分かった全く同感だ。実は今度私が来たのは、諸君に解散する様説得に来たのであったが、諸君の真実を吐露したところには、同感を表せざるを得ない。信念のない人々の意見なんかは私も相手にしない。どうか徹底的にやってみ給え、将来はなんとかなるであろう。三年後には再びこの鏡泊湖にやって来て、諸君の元氣な顔を見ることにしよう。それまでは頑張ってくれ」と少佐の報告書の結果、正式に残留認可が決定した。

残留組のその後

旧学園責任者と満拓公社との間で元学園財産の引継ぎ契約が交わされたあとは、残留組も将来の計画を立てて、真剣に今後の問題を討議することになった。仲間たちが出立したあとは、湖畔の大きな長い宿舍がまるで静まりかえり、閑古鳥の鳴く寥々たるありさまで

あった。一偶に分散、居を構えて、早くも一、二か月経過した。それぞれ入口に掲額した。曰く「臥竜窟」

対面には、負けじと墨痕鮮やかに、「大鴻寮」と応える。住居の呼称で張り合ったのも、ややもすると、頭をもたげる沈滞気分に対する、自警策であったのだろうか。

食糧増産に全員体当たり

解散のためすべての支援者を失った現地では食べる対策が焦眉の急だ。総当たりで食糧生産に取組まねばならない。鏡泊湖一円を根城に活躍中の共匪陳翰祥が、軍、警、の討伐で姿を消して以来、治安好転したとはいえ全く安全の保障はない。夜間警備人員の余裕はない、やむなく無警備体制でいくことになり一人決めの解放気分て熟睡をむさぼった。

開塾の機会到来

昭和十二年学園村危急のとき、お世話になった東京城守備隊長後藤中尉より満系少年の委託を受けたのを端緒に、東京城、寧安方面より満系八人、朝鮮系二人、他に関係者の日系六人が入塾した。学園再興は残留者

の使命でもあるし、専任二人で熱心に指導に当たった。いずれも優秀な少年ぞろいで本来の晴耕雨読方式の生活には充実感あふれ、満系の日本語の進歩振りは格別であった。協和会の推薦で檀原神宮ご造園勤労奉仕隊に参加するなど、順調な前進態勢に揺るぎなかった。

附記

文化大革命―九悪追放（親日家の追放）

日本の敗戦から一九七八年（昭和五十三年）の日中平和条約批准に至る三十三年間は、中国の内政外交の激動期にて、特に一九六六年から始まった。

プロレタリア文化大革命は知日派の受難時代であったと聞き及ぶにつけ、塾生諸君が過渡期をいかに乗り切ったか、案じられてならない。

青年義勇隊一個中隊受入れ問題

両者受入れ条件討議の結果、名称は鏡泊学園訓練所とし、所長に学園のN先輩が着任、ほかに二人専属指導員となり開所された。内原で基礎教育を修得した。

純真な青少年の心にいつか不満が生じ、反発心は日に増し所長排斥運動に発展した。かくて運営の流れは原

点に戻り、学園が手をひき内ヶ原一本で運営することになった。いずれ将来彼らも冷静な判断を下す時が来ることを信じて、中途放棄をいささかも後悔しない。

協拓組合の設立

一方学園村は満拓公社より経営資金借入れに当たり、協拓組合を設立した。初代組合長にS兄が就任した。私は推薦を受けて牡丹江に満拓公社主催の複式簿記講習会に参加した。村造りが順調に進み、経済力にも多少余裕ができたことを記憶している。

大家族主義

経済活動は共同経営を主体として運営された。だんらんと友情の固い結束の元で、信頼し合った仲では、個人の自由にいささかも支障を生じなかつたばかりかむしろ生産の向上に効果をあげた。「衣食足りて礼節を知る」の諺の如く、多少余裕が生じたこのころ、いわゆる将来計画というか、いつまでも自由な、独身生活を取り上げて、妻帯者増を見越した組織の在り方の検討が、話題にのぼり始めたのもこのころであった。

鏡泊湖村の農業

東西十里南北二十里の広大な鏡泊湖村の中で実際の耕作地は、松乙溝と房身溝夾鷄河沿いに延びる、細長い地域が腐蝕土層厚く、既耕地が集中していた。一戸当たり耕作面積は八三町六反程度であった。昭和十三年ころから、治安維持上強制的に、集団部落造りが始まり二年後には山間に散在した農家の集団部落が数か所も完成した。耕地は約千五百町歩で、内四百町歩の水田が含まれ、満人は畑作、朝鮮人は水田作りが主であった。

協拓組合の営農

南湖頭の水田三十町歩と、湖沿地区に畑二十町歩の耕地で、大豆、包米、小麦、燕麥に集中した。野菜は馬鈴薯、白菜、大根など冬期間貯蔵用が選ばれた。内地産より甘味が多いのが特長であった。

寒冷地の野菜栽培

早い冬の到来対策として温床を是非造らねばならない。結水期が十一月十日前後であるから、十月中に消費量相応の温床を用意したい。私達は深さ二メートル長さ二メートル程度の床四個を用意した(本床一、移

植用三) 結氷期に入れば十字鎌も全く役立たない。温床には発熱用に落葉などを踏み込み来春の播種期に備えた。無肥料で充分収穫があがった。

営農は在来農法による

経営規模にふさわしい、家畜相手の在来方式に依るしかなかった。六、七月の成育期の除草中耕の良否が収穫を左右する。決定的要因になることも汗を流したおかげで体得した。ちなみに南瓜など一昼夜に五十センチも伸長するのには驚いた。

いよいよ待望の収穫期到来

八月中旬の麦類の収穫期ともなると、朝夕の冷え込みを肌を感じ、着衣を一枚増やさねばならない。九月に入ると、水稲、包米、大豆の順に進められ、十月一ぱい重労働の連続である。このころは辛い乾燥季中で、麦類大豆は大きな野天積みで、逐次脱穀する。

脱穀場造りはあらかじめ地面を平らにならし、その上をローラ(石頭コンゾ)を驢馬に牽引させて踏み固めて出来上り。この上に適當の厚みに拡げてローラを転がすこと小半日、脱穀は単調な作業も風次第で五、

六石の調整が可能である。原始農法も案外すてたものでない。

朝鮮雉餌を求めてあらわれる

脱穀期に入ると野山から姿を表わした朝鮮雉が作業所周辺に群生している。罾で容易に二、三羽は捕獲でき食卓をにぎわした。作業合間の罾餌も楽しい思い出である。

水田経営

初年度は松乙溝沿いを開墾して直蒔法で幼苗期は順調で実りの秋に望みを託したが、鏡泊湖一円の大雨で冠水、全滅した。次年度は南湖頭房身溝沿いに三十町歩開田した。反収二百四十キロの好成績をあげ、自給米を確保できた。品種は在来種を流用した。

畜産部の多角化をめざして

在来馬二十頭の外に鮮牛十頭が主畜で、養豚はパークシャ種五頭に在来種三十頭で逐次改良豚が増殖された。分娩時のM君の管理振りは苦力房子に同居して子豚の圧死防止に当たるなど徹底した入魂振りには頭が下がった。又出向活動中のS君の努力で、満鉄より、

農安馬五頭、羊メリノ種五頭、蒙古在來種十五頭の寄贈にあずかり、沈滞気味の所へ曙光を見る思いであった。二年後には待望の羊毛が多少生産された。紡毛技術を習得して、靴下、手袋、セーターなど試作されるし、近き将来のホームスパンも夢ではなくなった。滿拓融資による日本馬五頭が入村したのもこのころであった。滿馬馴れした目で見る日本馬は格別大きかった。嚴寒期にどの程度耐え得るか心配である。

養蜂

鏡泊湖の五月は豊かな草花と丘陵に自生する梨、山査子、野葡萄などの一斉開花時の豊富な密源に注目したT兄は地元寧安で、蜜蜂三箱を入手した。現地到着は活動期が過ぎた八月末であった。一般に開花期が集中して、短期間であるのが難点である。これらのことは今後の宿題であった。

野菜貯蔵庫造りと管理

冬越しの必要施設で、凍結前に是非完成したい。学園村では縦三間、横二間、深さ一間半の穴を掘り下げ、上部に丸太材を渡し、木枝や野草を三尺程度敷き詰め、

一、二尺覆土することで酷寒中の保温に支障なかった。庫内の収納量を増すための棚造りが必要。根菜類は最下位に貯蔵、週一回の腐敗葉除去などの手入れが欠かせない。蜜蜂の越冬場所に理想的なり。

鏡泊湖の果樹の現況と将来の見通し

湖畔沿いの野葡萄を先ずあげねばならない。夥しい自生と、大きな房が累累と垂れ下がり、甘味多くわずかの糖分添加で結構な葡萄酒ができた。山には梨の木が多く、これも改良すれば南滿地方に劣らぬ生産地として有望であった。林檎、山査子の自生も多かった。平地少ない現地では研究余地は充分あった。

加工

味噌、醤油の醸造はO兄の指導で自給を満たした。魚肉燻製は試験程度で将来に道を開く。

木材伐採

滿州拓殖公社は学園村の更生と、開拓団用材供給を目的に一万五千石の木材伐採搬出事業を認可。M氏が総合責任者となり、木材部が組織された。安全対策にまず自警団を組織、滿系四十人で編成した。現場の小

屋がけ、工人の食糧や防寒衣類の調達、機材の整備を
終わり、着工は昭和十四年秋から翌年春にわたる短期
間であった。伐採地は溝溝より入った庫当溝一帯で、
資源はすこぶる豊富であった。自然倒木と松子兒メシジロ（松
の実）取りの伐木が重なり合って、歩行に支障あり。
樹種は赤松、白松で期間内の伐採ができたが、搬出に
手間どり、完了日が多少延びたが懸念した事故なしで、
大仕事を完遂できた。

屋外簡易製材所造り

学園村建設現場に建築用材が搬入されて来た。A君
の責任で製材機据付けを終わり運転開始。

石材の採掘と搬出

個人家屋用基礎石材は、近くの山野と畑の隅に積み
上げ放置したもので充分使用量を満たした。

予想もしない副産物

畑一隅を採掘中、地下三メートルくらいの所から、
考古学書で見覚えある石器七、八点を発見した。農耕
用に使ったと思われる、普通より大型のもの、粉碎
用に使ったか先端が丸みを帯びて摩滅したもの、切断

用の刃先を扁平加工した石斧など遠い古代の息吹に接
した。又ほかの場所からは、青銅製大型印が発掘され
た。字体は篆書で損傷なかった。有識者李老人の鑑定
によると「この地の豪族が、通行許可証に押捺した認
印ではないか」と推測した。遠い古代この地が、上京
竜泉府（東京城）と中京顯徳府（敦化近く）間の重要
な交通路であったかも知れないなどと思うと李老人の
鑑定も、満更でないと思った。これらの資料は将来専
門家の鑑定を待つこととして、採掘場所と日付を記録
して大切に保存していたが、十九年春の応召でことご
とく散逸した。

念願の建築工事始まる

村の建設に当たり相談の結果、第一条件は風致を生
かす、第二安全、第三あまり金をかけないの三つを主
眼に着工することになった。湖岸から三十メートル離
し。塾舎を中心に各戸間隔を三十メートル程度とした。
対匪防衛上窓を小さめとして死角を広く取った。窓は
二重とし、外壁は土壁子（土れんが）一枚半（三十セ
ンチ）積み基礎工事は不凍地点下三十センチ掘下げ、

石積み地上五十センチとする。居室二、土間一で暖房はオンドルと壁ペーチカとし、炕^{オンドル}上部は壁紙貼り、豆油塗布で強度を増した。外に敷物を使用しないため、芥がたまらず長い越冬が衛生的であった。一部屋は壁ペーチカを採用。炊事の余熱利用で、燃料の節約を図った。煙突は耐久上煉瓦作りとし、屋根は板材を使用した。乾燥地ゆえ耐久性もかなりあるとのこと。

工人の選定

牡丹江、寧安地区ではほとんど契約が結ばれた。木匠、瓦匠、れんが工各三十人程度であった。煉瓦焼きはベurlin大会参加マラソン選手、村社修平氏の実兄久平氏が請負った。

順調に建設が進み予定工事を終わる

個人家屋の防寒には天井の仕様に格別留意した。すなわち化粧ベニヤ張りの上に、製材端切枝を敷き、その上に鋸屑を四、五寸厚みにしき詰め保温効果をあげた。第一期工事は個人家屋十三戸塾舎一、畜舎四棟、使用人家屋一戸完成して、当面の需要を満たした。第二期工事は、南湖頭に水田経営基地として、在来式草

屋根の三間房子、二棟が完成した。

漁業

鏡泊湖は琵琶湖の半分の面積、水深平均四十メートル、魚類は極めて豊富で、おおよそ五十〜六十種類あるといわれている。経営は先住民と組合を組織して運営された。漁期中は魚屯で共同生活して大網二流の操業であった。漁場は大孤山以南の往復可能な距離が選ばれた。主な漁種は、鯉、鮒、白魚などであった。

漁法は四季それぞれ異なり、結氷後の氷下地引きあみが主財源で、夏漁の糸掛子、流し網、投網などで漁獲は少量であった。冬期間の労働は苛酷で、零下二十度の吹雪をひるまず漁獵強行。近くから遠くへ漁場は延びる。湖底の流木など障害物の多いところほど漁類の良き生息地で、時には障害物に邪魔され、骨折り損の時もあった。網下し場所の選定は経験豊かな把頭の胸三寸にあり、一日の成績が決定する。私たちの代表T君の愚痴を聞いたことがない。責任を立派に果たして、村の経済に多くの潤いをもたらした功績は大きい。

油房

先住民の要望に応えて、中古の搾油機二台購入した。工場は魚屯に隣接する。在来家屋二棟を流用した。多少内部を改造して二台据付け、ほかの一棟は大豆倉庫とした。僅かの改良費で運転可能に漕ぎつけた。問題の油匠も、近くの集団部落居住者と雇用契約がすまされた。

自家生産大豆を手始めに運転開始

住民たちも今までの片道三十里教化行と、近い片道十二里の東京城行とも縁切りとなり、必需品の油と家畜用豆餅の調達ができて大変喜ばれた。交代勤務で頑張る油匠の汗は今日も流れる。

精米

松乙溝沿いの開墾田は増成に苦労したが、折からの異状増水が決定的痛手となり、放棄して新規に対岸南湖頭に三十町歩開田された。房身溝上流より灌溉用水を引き、水利に恵まれたため、反収二百四十キロ程度の収穫が得られた。このことで大いに自信を持ち農閑期の精米で漁業部八十人の食糧供給が可能になった。

購買組合

南へ三十里、北へ十二里の山里住いの、村民の願いを入れて、部落内に生活必需品の販売所を十二年春開設した。専従に李老人が当たり、日用雑貨を主に取り扱った。発足日浅きことと零細資本ゆえ品数がそろわない難点があったが、評判は上々であった。Y君が結婚帰省中の留守役を引受けた。多少でも商品を増やして、責任を果たしたい。旧正月を迎える機会を逃がせない。注文品メモを老人から受け取った。雑貨や嗜好品、晴れ着の布地、綿花など仕入品を確認した。治安は隔世の感あるも油断大敵、警察隊に同行を依頼した。東京城では宿賃をけちって仕入先店舗従業員宿舎に割り込み、シラミの襲撃で一夜をウトウトの内に明かした。品そろえに一日駆け回り、馬車一台分仕入れを終わり積荷をすませ、警察署へ出頭帰路の同行をお願い快諾を得た。店舗陳列棚も少しはにぎやかになった。

記念碑用石材の搬出

鏡泊湖周辺にはすこぶる岩石が多い。記念碑に向く良材はどこにあるか。探検から始まった。魚屯の一満人の通報で、対岸胡芦威子に大きなものがあるとのこと

で、有志四、五人で下見に行く。御殿場から来鏡中の石屋さんの鑑定で、材質は赤ミカゲで上々とのこと。重さ五、六トンあるやもしれず。結氷を待ち水上橋運搬に決定した。橋は直径六十センチぐらいの赤松丸太材を使い堅牢に作成することで木匠に特注した。引き綱は漁屯より借用して準備完了。当日は漁屯より四、五十人の奉仕があつて八キロの水上も難なく通過した。二日めは湖沿から現場までの上り一キロを無事着、喝采をあげた。

山田総務外殉難者七周忌記念事業

記念碑除幕式は次の通りである。

昭和十五年八月十五日鏡泊湖畔に徳富蘇峯先生の筆による碑が建立されたが、その除幕式にご遺族の方が参加された。八月十五日午後二時よりいよいよ記念碑の除幕式挙行とのことで、促されて学園より半キロくらの地点に集合した。来賓は第一便船で五、六十人、第二便船では官民の名士四、五十人が到着、義勇隊のラッパ吹奏による歓迎を受けた。集まって来た来賓は、次のとおりであつた。新京尚書府大臣哀全鑑以下二十

一人、定刻山田徳君の手により除幕。徳富蘇峯の筆による雄渾なる「興亜烈士の碑」は旭日に燦然と輝く。主催者側牡丹江省次長向野元生氏の式辞、その他多数の祝辞、祝電の披露があり、終わりに遺族代表山田徳君のあいさつがあつて閉会した。一向は帰途大廟嶺遭難現場に立ち寄り、頭山満先生揮毫による記念碑「嗚呼殉国十九烈士の碑」に参拝往時をしのび帰路についた。

鏡泊湖事件（救出運動）

昭和十九年春、鏡泊湖村長外鮮系三人を含む四十三人の有力者が一斉に警察に検挙拘留された。罪名は「反滿抗日である」彼らは皆私たちと心おきなく交渉を持ち、正業に生きる実直者ばかりだ。こんな馬鹿げたことがあるはずがない。後方攪乱の魔手に乗つてたまるか。皆十年の親交のある人達だ。彼らを誰よりも知る者は私たちだ。奮起一番救出に最善を払わねば面目なしだ。この時、学園村では応召者多く残留十人程度であつた。対策協議の結果、代表を選出して作戦が展開された。まず寧安警察庁を訪ね、真相究明に当た

るも埒あかず、新京まで出頭究明に当たった。幾多苦難の末、法曹界の有力者の協力を得て死刑直前で全員無罪釈放を勝ち取ったことは貴重な人間愛の印となった。民族協和秘史として私どもの代表二人の活動を記憶に留めたい。

開拓団用地買収協力に参加して

昭和十二年から十三年にわたり、満州拓殖公社の寧安県下開拓団用地買収に協力した。私たちの仕事は満系職員に協力して地券の確認と地目別面積の割出しに当たった。順番待ちの長い列には土地を手離す苦汁の顔が続く。日本の開拓政策を批判するつもりはないが、現地の実状をしんしゃくした弾力性があってほしかった。

鏡泊神社の建立

地域住民の守護神祭祀案が坪井君によって提唱されたのは、殉難者七回忌の法要がすんだころであった。反対者あるはずがなく、衆議一決建立場所は大河口先端の大頂子とする。海拔四百二十メートル（水面上八メートル）で湖を眼下にして通称鏡泊富士の名山で

ある。祭神は本宮に天照皇大神、末社に猿田彦様に決定した。伊勢神宮に出頭、御霊を奉戴して帰満、社は内地で特注された。十五年九月地鎮祭をすまされ祭祀の式典は地域住民が多数参加して、盛大に行われた。願わくば私たちだけでなく先住民みんなの、精神のよりどころに育てあげねばならないと心に誓った。

虎、畜舎を襲う

集団部落の高さ三メートルの囲壁を跳躍進入した大虎に、多くの豚が食い殺された事件の五日後、十一月末のころであった。学園村厩舎の満馬三頭が襲われた。いずれも首筋より下腹部にかけて七十センチの裂傷は見ても無残であった。苦力頭の話では昨夜半、虎の来襲に相違なしという。同夜Tさん宅玄関に繋がれた愛犬シェパードがさらわれた。これも静寂の中の兇行であり、犬も馬も威圧されて声を失ったらしい。足跡は湖畔に通じていた。あくる晩から警戒態勢をとり徹夜したが、人間臭を感じたか全く姿を見せなかった。

野猪狩り

包米がみのり収穫期が近づくと猪の大群が出没して

食べ荒らす、農民はこの時期になると毎晩徹夜の見張番で、空缶を叩き煙を上げて大声で追い散らすのである。依頼を受けて日暮れを待ち、仲間四、五人で見張番に参加した。大物を狙い過ぎて蚊にくわれただけで一夜が明けた。

総局のバス水没命びろい

妻帯者八人に増えた昨今、仲間の熱心な勧誘と、心境の変化でS君と共に嫁取りの帰省をした。戦時中のこととて挙式は簡素にすませた。十一月の結水も始まったはずだし帰満日も決まった。この機会に伊勢参りをする事になった。五十鈴川の清冽、玉砂利の音、心身の契をすませ、内、外宮に詣で、大任を果たした思いで朝鮮經由帰路についた。東京城では顔なじみの食堂おやじ宅で一夜お世話にあずかり、翌朝発の総局バスに乗車した。十一月早朝の冷気は、着物姿の女性には身にしみたことだろう。警乗員一人、満席である。北湖頭からは水上を七十キロの速度で突っ走る。珍珠門手前二キロ辺りを走行中、前方左湖畔沿いを狐らしき動物が走って行く。警乗員は運転手に指示追跡。至

近距離になった瞬間、ゴッソんと湖中に落ち込んだ。水が流れ込む。座席に達した冷水は刻々と増す。前方乗客の避難待時間の長かったこと。水は座席を埋めた、はやる思いで、座席伝いに前進、唯一の避難口、運転席前方ガラスの蹴破られた穴より、ボンネットにはい上がり、家内を励まし避難させ、最後の跳躍で確かな水上に下り立ち、九死に一生を得た。対岸に避難、焚火で暖をとり、救援車を待った。乗換えて現場近くを通過する時は、屋根の頂点が十センチ程度現れていた。一気に沈まず幸運をつかんだ。幸いしたのは産業部水力電気工事の影響で結水が二段凍結であったため最初の結水が車体を一時支えたこと、お伊勢詣りの神のご加護にも感謝したのである。

母の来園（異国の情け）

初孫の誕生の嬉しさと、鏡泊湖を見たい一途の思いで内地から母の来訪を迎えた。三、四週間の在園予定日は夢の間に過ぎた。帰路の幸便なく困惑中、劉さんの馬橋が東京城へ出ることを知り便乗を依頼快諾を得た。三月ともなると日中はかなり寒気がやわらぎ、水

上通行は難なく終わり北湖頭着。ここから陸路に入る。早春の陽射しが雪に反射してまばゆい。

この調子なら日没までには街到着も可能と思つたのも東の間で、平地の雪は風に飛ばされ地はだがそこそこに見える。三頭だて牽引馬は遅々として進まず、阿馬河子屯の煙が遥か西方にたなびいて見える。陽が全く沈み気温は下がるし、余り健康でない母の身体が案じられる。

劉さん曰く「街まで直行至難ゆえ知人宅で一宿して行きたいがどうか。」と、もちろん快諾。深謝した。自然と共に生きるこの集落では、灯火の残る家は一戸もない。孫家では寝静まった所へ時ならぬ来客にてんてこ舞い、八十四歳の老婆まで起き出て、何やらしきりに指示している。母に近づき「寒かったでしょう空腹ではないか、直ぐ粟粥ができるから食べてゆっくり休んで下さい」と、暖の利いた炕カウで一夜を明かした母に老婆の気配りは、親身にあふれていた。

翌朝土間の隅に佇む母に「良く眠れたか、疲れは癒えたか」とねぎらいの言葉、母はただオロオロ意を解

して改めて感謝の目を潤ましていた。「今日は駅へ行くのだからその髪をこれで梳いて行きなさい」と我が櫛を取って手渡した。異境の地で細やかな人の情けを体験してもらったことは苦難の旅ではあったが最高の土産となったと思う。

応召本土防衛部隊に合流

子供の病氣治療のため家内と佳木斯医大に出張中、召集令状を入手した。後事を在学中のS君に託しそのまま東寧の関東軍自動車六十六大隊に入隊したのは十九年二月、三十歳の補充兵であった。自動車操縦、車輛整備対ガス訓練と、ソ満国境最前線ベトル台の丘陵で連日の猛訓練を受けた。このころ転属命令で兵の移動がしきりとなる。現地自活担当兵長の転属で本部附となり、養豚管理者を任命され、豚飼いの満人相手の幾日を過ごしていた。

九月大隊演習で出勤した。北鮮清律着、貨物船に全装備を搭載して敦賀から新潟へ移動、ここで幡三六〇四部隊に合流して本土防衛に当たる、と命令された。最終駐屯地宇都宮市日光街道徳次郎で終戦を迎えた。

終戦後の学園村の状況報告

奥沢君より次の通り受けた。

前略、その後八路（中共軍）の治下になって湖畔も落ち着いていた。学園同人はその間、色々の場面で村人の世話になった。現にこうして学園組が一緒にいられるのも——略。分散配置するのは可哀相だからと、わざわざ一地区（石頭河子）を選んで居住させ、農耕や漁業で自活できるようにしてくれたのである。また昨年ソ連軍の日本人狩りの情報が入ったときなど、暗夜に三隻の舟を出して、婦女子共々我我を東大泡まで移してくれ、村人の温かい庇護を受けたものであった。水田に稲穂が垂れ始めた二十一年八月二十二日引揚げの連絡が東京城から届いた。出発準備は急を要する。降りしきる雨の中で、てんやわんやのさ中に趙連祥が別れにやって来た。脚の悪いO君がいるのを見て馬車を世話してやろうと言ってくれたが馬車代が払えぬからと断ったのに、馬車一台を連れて来た——略。村公所へ別れのあいさつかたがた借物の返却や作物の処分を依頼するためT君と二人で出向いた。主席は

王永久といい、彼はニコニコしながら「来了」と言って席を立った。「王先生」というと「朋友じゃあないか」とボンと肩を叩いて「学園とは身内のものと同じだ、すわりなさい」と椅子をすすめてくれた。中国齧をつまぐりながら、こちらの用件はすべて「承知いたしました」で引受けてくれた。日本が敗北した後も以上の民情であったとのことである。

結論

私は昭和八年四月東京の国土館で教学をうけ、八月渡満、同九年現地鏡泊学園入り以来、同十九年軍人に召集されるまで十一年間鏡泊湖畔で、現地人と苦楽を共にし民族相協和して営農に精進した。

満州鏡泊学園の建学精神が現地満州人と混然一体となって王道楽土建設のさ中に、日本敗戦の憂き目にあつた。しかし我々日本人に対し現地満州人はことごとく同情と、日本人の立場を理解されて、徹頭徹尾日本人の生命と生活を護ってくれた。日本人引揚げに際しては、涙を流して別離を悲しんだのである。

これぞ、日中友好親善の雄渾なる精華であると、奥

沢君が実感をこめて結んでいる。さもありなん。

私は青春のすべてを捧げて支那満州国の鏡泊湖畔で、社会共同生命帯で居住した中国農民同志に感謝するとともに彼等の末永く幸せを祈る。

【執筆者の横顔】

三堀氏は、神奈川県茅ヶ崎市の住人、若き人のあこがれだった、岩倉鉄道学校で学び、運輸交通の第一線で働く夢を描いて卒業したが、そのころ五大新聞に新満州国の文教部大学令による第一号が満州鏡泊学園を創立して亜細亜全土に理想郷を建設する人材を育成するとの報道を見聞きするに及んで、三堀氏は血湧き肉おどるの感にうたれ、昭和八年四月、早速試験場の国土館で受験し、合格した。

渡満するまで、四か月間国土館の委託生として史学、地学、倫理哲学、政経学の学習や訓練をうけた。学園創設者、山田悌一総務は四十二歳だが既に大人の風格で話される言葉そのものが説得力に富み、お経をきくごとく、その人生哲学に傾倒した三堀氏は、この山田

総務と生死を共にしたい決意を抱いた。

八月に勇躍渡満し、教化についたが、治安おさまらず、奥地に入れず、教化で越冬し、翌春二月現地に入った、学園の建設場所は吉林省寧安県の鏡泊湖の湖畔である。

晴耕雨読の学園建設が、その見通しのついたころ、山田総務外十四人の一行が大廟嶺で匪襲にあい全員殉職された。そしてその翌年昭和十一年くれ学園解散の悲劇で幕を閉じた。二百人の学園卒業生は自営業、開拓団指導員、公社、官行吏などにそれぞれ四散して行ったが、意志堅固な三堀氏は同志二十余人とともに山田総務外同志の墓を守りながら鏡泊学園塾を設置して日、鮮、満各民族の青少年を育成する道場で自ら訓育の任にあたった。農耕して家族の生計をたてながらの牽仕であり悲壮この上なしである。

現地の満州拓殖公社事務所の委託をうけて簿記会計を受講し、習い覚えた技術で郷村や団体の面倒な税務会計の仕事に当たっていたが、幼児が病気にかかり夫婦で佳木斯医大病院に向向っていたところに、三堀氏

に召集令状が届いた。昭和十九年、三十歳だった。

夫婦、親子は生木をさかれる思いで、病院に妻子をおいて、三堀氏は東寧の関東軍自動車部隊に入営し、

北鮮の清津港から新瀉に上陸、宇都宮について防衛の任についたところで日本敗戦となり、ただ、号泣した。

三堀氏の妻子は、ソ連の迫害で瀕死の苦痛、言語に絶するものがあつた。生きて日本に引揚げてこれたのは、満州人の協力のおかげであると涙を流す三堀婦人の弁である。

引揚後夫婦力を合わせて茅ヶ崎に家庭を築いて幸せな生活をおくっている三堀氏は、山田悌一総務の教えのおかげだ、なんとしても山田悌一総務の追悼碑を建立すると、精進している。その姿に敬意を表する。

(出)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

最後の義勇隊

岐阜県 斎藤 春由

昭和十九年三月、聖戦の名のもとに始まった大東亜戦争も敗色ますます濃く、南方諸島の玉砕の報せ、本土空襲の憂き目にもめげず、国民はまだまだ勝利を確信、日夜防空訓練などに励んでいた。

当時、私は国民学校高等科二年生、満十四歳になつたばかりであり、自分の進路を決めかねており、担任の先生に勧められるまま、満蒙開拓青少年義勇軍に志願していた。

仲の良かった次姉が、北京に嫁いでおり、少しでも近くに住みたかったのも動機の一因となった。

身長百三十九センチ、体重四十一キロ強、整列すれば前の方であつたが、それでも同郷の四人のうちでは二番目に大きい方であつた。

昭和十九年三月十四日早朝、家族や大勢の方々に見